

共に未来を育てるために
進路指導の

現場から

第9回

2016年度は4人が
海外大へ進学

——貴校の進学状況について、教えてください。

本校は国際文化科、情報科学科の2学科を設置する県立高校で、2015年度からスーパードグローバルハイスクール（SGH）に指定されています。1学年約140人が在籍し、ほぼ全ての生徒が4

年制大学をめざします。本校の特徴は、国際文化科の中に2年生から海外大学進学コースを設けている点です。このコースには例年5、6人の生徒が在籍し、通常の授業のほかに「グローバルスタディーズ」という授業を設け、英語の外部資格・検定対策、エッセイライティング指導などを行います。2016年度の卒業生で海外大学に進学したのは4人おり、

面談を何度も重ねることで
海外大を含め志望理由を明確にさせます



新潟県立国際情報高校
進路指導主事

金子将人

かねこまさと ●教員歴17年。同校に赴任して6年目。2016年より現職。進路指導においては「生徒に後悔させないため、また自分自身も後悔しないために、今、考え得る最善手を打ちたい」と語る。専門科目は日本史。

*1 カリフォルニア大学サンタバーバラ校やカナダのカルガリー大学などに進みました。

——海外大進学の希望者は、どのような生徒が多いのですか。

アクティブで何にでも興味を持つタイプが多いようです。「できるだけ若いうちに海外に出て、いろいろなことを吸収したい」と話す生徒もいました。

このコースは「生徒が自分自身でやりたいことを見つける」というのが基本方針です。本校でも海外大進学講演会を実施したり、留学・海外進学フェアの案内をしたりはしますが、生徒は自ら積極的に海外大に進学した先輩に話を聞いたり、SNSを活用して情報を収集しています。勉強の合間を縫って演劇にも打ち込んでいた生徒は、芸術系の学問が学べる海外大を自分で探し出し、進学しました。

情報を集めるだけでなく
生徒に深く考えさせる

——高校全体の進路指導に関する取り組みを教えてください。

1年次は職業意識を高める取り組みを行っており、毎月キャリアガイダンス講演会を開いています。加えてSGH事業の課題研究として

●国際情報高校 ▶1992年に開校▶国際文化科、情報科学科の2学科▶2013年度海外大学進学コース開設。2015年度SGHに指定される▶2016年度の合格実績は国公立大学70名(現役のみ)、私立大学の主な合格実績は、法政大、日本大、専修大、東洋大など。海外大の合格実績は、アメリカ、カナダの17大学。海外大進学者は4人。

高校訪問
ワンポイントアドバイス

学生の姿がイメージできる
具体的な説明をしてほしい

高校訪問にいらっしゃる大学の皆さんは、新しい教育プログラムなどについて、積極的にアピールされます。しかし、「それによって実際の学生が具体的にどう変わったのか」までは、あまり見えてきません。それがないと、教員も生徒にその大学を勧めにくいですし、生徒自身も自分の未来図が描けません。入学後の学生の成長にまで踏み込んで、説明していただきたいですね。

て取り組んでいる「クリティカルロジカルシンキング」というプログラムの中では、自分の職業意識を確認したり、グローバル企業から出された課題に対してグループで解決策を考える時間を設けたりしています。

2年次には、全員で同じ大学のオープンキャンパスに参加したのち、それぞれの志望大学のオープンキャンパスに参加させます。2回参加させるのは、学びの内容などが大学によって違いがあることを理解させたいからです。

——進路に関する生徒の悩みはどのようなものがありますか。

海外大学進学コースの生徒の場合、「時間が足りない」という悩み

みが寄せられます。英語の成績も上げなければなりませんし、出願する大学の数だけ志望理由書を書かなければなりません。書いて終わりではなく、内容を吟味する時間も必要ですから、タイムマネジメントに苦労しているようです。

一方で、国内大への進学希望者からは、「3年生になって成績が伸びない」という悩みをよく聞きます。しかし、私たち教員からすると、表面的な部分だけ見て志望大を決める生徒が多いことに問題を感じています。大学の情報は積極的に集めていますが、「なぜ、その大学でなければいけないのか」を深く聞いていくと、言葉に詰まってしまうケースも多くあります。そのままではミスマッチな進学をしてしまうことにつながりますから、生徒に考えさせる機会を与えるため、年間5回程度の面談を行っています。

調査書では実績以外に
成長度を評価してほしい

——来年度(2018年度)の入学生は、大学入学共通テストを受験する最初の学年になります。新入試への対応はすでに考えていますか。

いろいろと対応策を検討していますが、入試改革自体が流動的な部分もあるため、本格的な対策はスタートしていません。しかし、本校ではSGHの活動はもとより通常の授業においても、「思考力・判断力・表現力」の育成を意識して取り組んでいます。ここを徹底



すること十分な対応ができると考えています。

例えば、全学年で実施している毎朝10分間の小テストは知識を詰め込むのではなく、記述力や思考力を付ける内容になっています。

——多面的・総合的の評価に関して、高校側から大学に「この部分を評価してほしい」という要望はありますか。

高校3年間というのは、生徒が大きく成長する時期です。調査書に書かれた成果や実績だけでなく、その生徒の「高校入学後の成長度」を評価してもらえるとありがたいですね。そうした生徒は大学入学後も、さらに伸びる可能性を秘めているので、まさに大学が求める人材ではないでしょうか。

本校は1クラスを3人の担任が受け持つ「3人担任制」を取っています。ある担任が厳しいアドバイザーをしたら、ほかの担任はそれをフォローしたり、見守ったりするなど、意識して役割を分担して

いろいろな対応策を検討してはいますが、入試改革自体が流動的な部分もあるため、本格的な対策はスタートしていません。しかし、本校ではSGHの活動はもとより通常の授業においても、「思考力・判断力・表現力」の育成を意識して取り組んでいます。ここを徹底

海外大志望の生徒は
アクティブかつ
好奇心が強い

まとめ

成果や実績だけでなく
「高校での成長度」を
大学に評価してほしい